

# おおとり会だより

## 強い絆の形成を



静岡県立大学学長 廣部 雅昭

星前学長の後任として、昨年4月に就任をいたしました。着任早々おおとり会総会において挨拶の機会を与えられ、またその後の懇親会でも、出席された多くの方々との懇談することが出来大変嬉しく存じました。その際「私たちの母校がなくなってしまう……」という発言があり、私は「県立大が皆さんの母校ではないのですか」という事を申しました。しかしその言いながら、この気持ちは重く受け止める必要があると強く感じました。それは私自身が同じ体験を有しているからであります。戦後の学制改革と市町村合併の嵐の中で、私の母校も廃校になりましたが、合併吸収により残った学校を母校と感じたことがないからであります。その最大の理由は吸収された学校の卒業生を同窓生として扱わないばかりか、当時の思い出に残る貴重な資料なども散逸したのか存在すら明らかでないという不信感も働いているからであります。県立大の場合は事情も異なり、学内におおとり会専用の部屋もあり、また資料等も保存され、剣祭などへの参画もあるときいておりますが、おそらく十分でないという気もいたします。母体となった三大学がそれぞれ同窓会を有することは当然として、その延長線上にある県立大が同窓会総合的なものを恒常的に開催したり、在学生も交えた様々な行事を企画し、卒

業生との絆を深めるなど、県立大がそれぞれの母校でもあるという意識が自然に醸成されるような配慮が必要であると考えます。おおとり会に関する深い教員の方々も現在大学には沢山おられる訳ですから、皆様からも働きかけて頂くとともに、ご要望があれば是非直接学長にお申し出頂きたいと存じます。微力ながら最善の努力を果たしたいと考えます。

現在大学をとりまく社会環境は大変厳しいものがあり、自律的な改革を推進する必要性に迫られておりますが、世相を反映してか、自己中心的な風潮の中で、心の豊かさも、ゆとりも、潤いもなく、その結果聞こえて来る耳障りな摩擦音は、明るく活力のある新時代の学園形成にはそぐわないものであります。そのために部局の枠や世代を越えて、教職員、学生、卒業生に一体感を生み出すことが今こそ重要であると強く感じております。

県立大の学生の顔が見えないということをよく耳にしますが、研究・文化活動やスポーツ活動などで世間に名をなすことも大切であります。学生や卒業生一人一人が県立大の学生、卒業生であると誇りをもって名乗れる大学、愛校心が持てる魅力ある大学であることが先ず大切であると思います。

大学管理棟の近くにある、母体となったそれ

ぞれの大学のモニュメントは、県立大の新しい発展のための礎石であり、決して「墓標」にはしてはならないと思います。

県立大には「はばたき」と名のつくものがあると思いますが、「おおとりはばたき県大」となるの意識で、県立大発展のために力をお貸し頂きたいと心から願うものであります。

## あいさつ

おおとり会会長 牛木 琴

ミレニアム騒動で幕開けした本年でしたが、さしたる事もなく時を刻んでおります。同窓の皆様には、各々の場でご活躍の事と存じます。

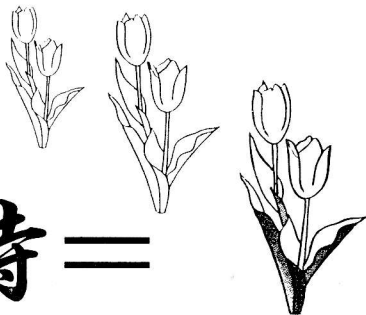
地球規模で飛び交う情報はめまぐるしく、時代、そして世界の変わり目が、ゆるやかにではなく、まさに角を曲って迫って参ります。多過ぎる情報の取捨選択に、皆様方も今こそ聡明な思考力の必要を痛感しておられることと思います。

怒涛のごとき情報社会の流れの激しさに流されて、その対岸にある変らないもの、積み上げてゆかなければ育たない技術とか精神が、なおざりにされているように思われます。一日では成らないもの、在り方、また、高齢化社会の問題など、日々考えさせられることばかりです。

豊かに育まれ、恵まれた学生時代を過ごした思い出のキャンパスは、形は変りましたがあの地にあり、メモリアルコーナーには、同窓生の思いを込めたモニュメント彫刻があります。県立大長廣部先生も仰言られるように、県立大学に引き継がれた建学の精神を今一度思い起こして、さまざまな問題に対処して参りましょう。

# 学部では！

## ＝県大への期待＝



静岡県立大学看護学部長 矢野正子

平成九年四月、静岡県立大学看護学部はスタートしました。

看護系大学は、平成三（一九九一）年四月には、全国でわずか十一校でありましたが、それ以降急速に増え続け、平成十二（二〇〇〇）年四月になると八十七校、大学院修士課程三十六、博士課程十一を数えるほどになります。大学における看護教育は、予測される二十一世紀の超高齢社会や益々高度化する医療の方向性、保健・医療・福祉の連携を前提にした多職種専門職による効率のよい良質なケアの提供、クライアントのQOLの確保・向上などの課題を踏まえて、看護人材の量のみならず質の転換をも図ることを目的としております。

ここで県大看護学部の過去三年間を振り返ってみます。

平成九年度は、第二回静岡健康・長寿学術フォーラムにおいてセッションⅢ「長寿社会に向けての看護学の展望」の企画・運営と、フォーラムに招聘したミネソタ大学看護学部スナイダー教授の学生への特別講義、地域の人々を対象とした公開講座「保健・医療・福祉の活用方法と健康生活」が実施されました。

平成十年度は、前年に引き続き公開講座「テーマ・自然と人間との調和を求めて、老化現象と健康生活」、また、学外からの参加を得て開催された公開セミナー「介護保険と看護の役割」、高齢者の病態薬理」、大学における看護教育のあり方」が行われました。海外からの研修生が来校する機会も多くなり、まず、

国際看護交流協会から「東南アジア諸国看護婦研修生（二〇名）と学生との交流会」に始まり、次いで開発途上国からの「看護管理研修（JICA 八名）」、そして客員研究員としてホンジュラス国立看護研究センター所長リアナ・メヒアさんが来日、研修中に本国が超大型ハリケーン「ミッチ」に見舞われる中で、

大学教育の実際、保健行政などを学び、さらに、ホンジュラスの医療について学生に特別講義をされるなど行動的でテキパキとした彼女の態度は忘れ難い印象を残しました。この時、ホンジュラス災害救援のため学生が募金活動に立ち上がりました。

平成十一年度は、三年生は十一年十月から本格的な臨地実習が始まり、病院四か所、特別養護老人ホーム二か所、保育園十か所、助産院三か所、訪問看護ステーション七か所を回りました。次に学部にとつて最も大きな仕事は、第十九回日本看護科学学会学術集会を十二月三・四日、全国から約二〇〇〇名の参加を得てグランシップで開催したことでしょう。看護関係学会では最大規模、しかも昨年をかなり上回る三百題の一般演説の応募がありました。メインテーマは「看護・今世紀の大いなる遺産と次なる提言」で、その主旨は、ミレニアムという境目の年をはさんで、今世紀については、看護職が今迄やってきたことをそれぞれの立場で振り返る、次世紀については、ジャンルを越えた看護への自由な発言を、というものでした。看護系大学が急増してい

る中で、看護学の発展や将来像の検討が課せられている折、少しでも看護学の前進を図る機会となったのではないかと思えます。この他に、助産学選択コースの開始、中田健次郎前教授へ名誉教授の称号授与、公開セミナーの開催、看護学研究科（大学院）の構想検討などを行いました。

看護学部を卒業すると、看護婦・士、保健婦・士の国家試験受験資格が、また、選択科目を学び助産婦の国家試験受験資格が得られます。大学卒看護職の数は、現在約六十万に働いている看護婦・士の中では一万人程度で、彼等の役割や機能の拡大はこれからの課題ですが、病院や保健所、訪問看護ステーションなど様々な保健・医療・福祉施設が就職先となります。また将来的には大学院等で学び、専門看護士としての認定など高度専門職業人を目指して実践者・教育者への道にも進まれるよう期待しているところで



特

集



# 今、県大看護

## 21世紀のケア

### 看護を勉強して

静岡県立大学看護学部三年

浅野 光子

私はずっと県立大学の近くに住んでいましたが、まさか自分がこの大学に入学するとは思っていませんでした。というのは、私は昔から科学実験が好きで、大学受験生の頃も実験ができる理学部を目指していたからです。しかし、母親が看護婦であることもあってか、看護婦として働きたいという希望もありました。そのため、理学部に行って、好きな実験を思う存分やってから、看護専門学校に行こうかな、と考えていたのです。しかし、受験生の夏に、県立大学に看護学部ができることを知り、県立大学は校舎もきれいだし、ここで看護を勉強するのもいいかな、と考えるようになりました。そうして、無事に看護学部の一期生としてこの大学に入学することができ、看護を勉強し始めてから、三年が経ちます。大学一・二年では、基礎科目や専門科目を勉強し、三年の後期に初めて、本格的な実習に出ました。実習では、さまざまな人と出会い、さまざまな事を学ぶことができました。県立大学で3年間、看護を勉強して、考えたことをここに書きたいと思います。

今、医療は急速に変化しています。今までの医療は、ほとんど「病院」で行われていましたが、医療の場は地域・在宅へと広がってきています。そして、さま

ざまな職種が、医療・福祉の場で活躍するようにもなってきています。また、住民も、単なる治療だけを要求しているのではなく、より高度で、よりよく生きられるような治療を求めています。これからは、病気を持つ人の病気だけを見て、同じ病気の人に対して同じ治療をするのではなく、その人にあつた治療法を探し、サポートをすることが求められていると思います。そのためには、さまざまな職種、例えば病院では、医師や、看護婦(士)や、薬剤師などが、共に協力し合つて働くことが必要です。誰かが権限を持つわけではなく、お互いに対等な関係を作り、それぞれの場所で、自分の仕事を生かすつつ、みんなで一人の患者さんを支えていくのです。今は、そのような状況の中



で、看護婦(士)が、どのような現場で、どのような働きができるか、探っている状態なのだと思います。これからの看護婦(士)は、そのような医療チームの中で、さまざまな職種や患者さんとその家族を結びつけるという、重要な役割も担つていくと思います。



看護の対象は人です。目の前にいる人が、何を求めて自分の目の前にいるのかを考え、さまざまな職種と連携しながら、その人をより良い状態にしていけることが求められています。その人の病気だけを見るのではなく、その人全体を捕え、家族にも焦点を当て、その人がより満足できる医療を提供していく必要があります。そのため、机の上で勉強するばかりではなく、実習という形で実際に現場に出て、人と触れ合うことが大切なのだと思います。患者さんと触れ合う事で、机上で勉強するよりもずっと大きく、大切なことを学ぶ事ができます。看護というのは人が相手の職業だからこそ、楽しくもあり、

難しくもあるのだと思います。

医療の現場が地域・在宅へと広がっている今、それに応じて看護の目も広がっていかねばいけません。看護というのは、医療の変化に伴い、常に勉強する必要がある職業だと思います。私も、いつもアンテナを高く張り、広い視野を持った看護婦になりたいと思います。病院や地域で働くようになって、その環境やシステムに慣れてゆき、そこで行われていることが当たり前だと感じてしまわないように、常に初心を忘れずに、自分のしていることや考えを客観的に見つめる目を持った人間になりたいと思います。

この大学で、看護を学ぶことができ、また、たくさんの方々と知り合うことが

## この学部に入學して 思ったこと、 感じたこと

静岡県立大学看護学部二年

安藤 芳雄

静岡県民は波風を立てないように穏便に過ごす傾向があるらしい。しかし、私は埼玉県出身なので、言いたいことを言っただけ、思いっきり波風を立ててみようと思う。

私がこの学部に対していつも感じていることは、なぜ、創設3年という「若い学部」なのにこんなにも活気が感じられないのか、ということである。本当ならば、日本一の(いや世界一の)看護学部にしようとかガンガン熱気が感じられるべきではないだろうか。何となく、試行期

できて、本当によかったと思います。大学生活も残すところ1年となり、看護婦という職業に就くことが、現実味を帯びてきました。これから先、どのようなことがあるのかわかりませんが、この大学で、悔いのないように充実した生活を送りたいと思います。また、ここで出会った、素晴らしい友達を大切にしていきたいと思っています。

実習では、患者さんやその家族、病院の看護婦さんなど、いろいろな人にお世話になりました。本当に色々な人に支えられて、看護婦になってゆくのだと思います。いい看護婦になって、この恩返しをしていかなければ、と思います。

間”というムードが漂っている。在学中の学生たちが、現時点で最もよい環境で学べるように工夫できるはずである。

最先端を走るものはバッシングを食らうのが普通であると割り切って、思い切った方針で、他に類を見ない看護学部を創りたいものである。静岡県立だからといって、何も勉学まで波風を立てない小宇宙にすることはできない。たとえ新しい小さな大学でも、他の大学の真似をする必要はまったくないし、したところで悪循環に陥るのではないかと、とにかく、試行錯誤している時期の割にはフィードバックが少なすぎるのである。看護過程において「評価」に患者さんのSデータ(S: Subjective)の略で患者さんが発している言葉・情報の意)が入ってこないようなものだ。

もちろん、学生の側も愚痴ばかりこぼしていいので、一致団結して改善を求めべきなのである。生徒会のような存在が必要であろう。しかし、2年間私が見てきた限りでは、多くの者は、「私がやらなくても誰かがやってくれるだろう」という他人任せの傾向が強い。また、小さなグループをつくり、とりあえずその中で自分の地位が安定していれば、そして単位を取り平穩無事に卒業できれば、あとのことにはおよそ無関心なのである。それは、みんなで盛り上がることさえ疲れるという現代の若者の姿なのかもしれない。

むしろこれは一般論であって、すべてに当てはまるわけではない。しかし、おそらく私が生徒会を発足したところで消えて行く運命であろう。

それゆえに、ここに先生方の力をお借りしたい。なかば強制的に枠組みをつくりさえすれば、その中できつちりと運営していく能力をほとんどの者が持つていくと思うからである。むしろ私の方がいい加減である。しかし、発足・運営のためにはどんな努力も惜しまないつもりだ。卒業後、静岡県立大学看護学部卒業であることを、自分がどこで働くにしても、誇りに思えるようなそんな学部になってほしい。それには、今の時期、礎ができてきたら、いよいよ「柔軟なしきたり」を創ることが必要なのではないだろうか。柔軟なしきたりとは、慣例にとらわれることなく、その時代に在学する学生、先生が共に考えて、その時代・ニーズに合わせた学部形態を自由にとれることである。



看護学部の特別寄稿ありがとうございます。今回、皆さんの文章を掲載することによって、私どもの思考範囲がグーンと広がったのではないのでしょうか。若者の「さあ、創ろうではないか。世界一の看護学部を」と声を大にする息吹に、刺激された方も多いかと思えます。

同窓会の皆様の中には強い関心を抱かれて読まれた方、今一度、身近に迫る介護のために学部で学びたいという思いに駆られた方いろいろだったと思います。生涯学習が叫ばれて久しいが、一般社会人が学べる公共施設はまだ不足がきつと、多くの方が、これを機会に卒業生も共に学び合えるような「開かれた学部」であってほしいと、願いをもたれたことでしょうか。同窓会の活動にも、そんなところの橋渡しが期待されてはいないでしょうかと考えさせられました。



# 介護雑感



食物学科(短大九回卒)

鈴木セツ

近年介護サービスは充実する一方だがその制度を利用する側にも問題があると義母と実母の介護に接して感じた。義母は施設に入所することに抵抗はあったようだが協調性に富んでいたため自分から慣れようと努力し施設の皆から大切にされ一年程の入所生活を楽しんで96才で大往生した。その間三ヶ月毎に家に戻ったが半身不随のため自宅での介護は大変だった。しかしこの在宅介護があったからこそ私は幸せに義母を見送れたと思う。半年遅れで実母が大腿骨骨折で入院。次なる介護を迎えた。実母は入院を嫌い、軽い痴呆が現れたので一日も早く退院させなければと家に連れ帰った。自分の部屋に落ち着けば正常になり、いたって元気に89才となった。実母はデイケアには行かず一日おきにヘルパーを頼んでいるが身体を拭いてくれることも断わってしまふ。この二人を比べて介護される側の意識革命の必要性を感じる。介護する身内には目に見えない束縛、精神的ストレスがつきまとう。自由な時間も欲しいし日曜には休みたい。介護される立場になった時にはすずんで専門の介護を受け入れ同年輩の集団の中で楽しく過ごせる人になりたいものである。家におのみがみつがずにだれにも好かれる高齢者になるよう心がけよう。

# 思いやる気持ち

被服学科(大学三回卒)

櫻井洋子

十年の主婦業の後、再就職して九年目現在福祉職を勤めている。大学で学んだ家政学と福祉とは近い距離にあるせいか、負けん気の強い性格のせいか福祉職のやりがいを実感している。

昨年は介護支援専門員の資格を取得し、介護保険の認定調査にも携わった。四月から始まる介護保険、二転三転する中、実務をする者として本当にこの制度で高齢者福祉が実現するのだろうか疑問を感じる。

今年届いた旧友からの年賀状、両親、舅、姑の介護に追われている文面が目立つ。「どうしようもなく、施設に入ってもらった」「痴呆が始まってきた」など。私自身も主人の両親と同居しているが、最近、舅の様子が以前と違う。痴呆が始まっているようにもみえる。身近なところに介護が迫っている。仕事ではやさしくお年寄りに接することが出来るのに、家に帰れば心の隅の鬼と戦う自分がある。痴呆の始まっている舅の不始末をたしなめてしまふ。

心あるケアするには家族関係がうまくいっていないとできないこと。「お年寄りを思いやる気持ち」こんなサービスは介護保険にはない。在宅福祉を進める介護保険でも結局は家族の努力次第なのだ。

# 最期

英文学科(短大三回卒)

窪川佳子



65才という自分の年齢を考えれば介護の問題は人ごとではない。たしかに今は足腰動けれど十年もたてば、いや明日にも怪我でもすれば動けなくなり寝たきりとなるかも知れない。その時、誰に頼るのだろう。同居していた姑が約十年前86才で亡くなった。亡くなる一週間前まで食欲はあり、家の中を動いていた。姑は最期までトイレは、ほとんどの場合、這って自分で出来た。食事も「ありがとう。ありがとう。」と云っておいしそうに自分で食事をした。姑は彼女の息子和息子の嫁である私とともに最期まで生活を共にした。

そして私の実の母は母自身の希望で一人て暮らし86才まで店を経営し、亡くなった。

一年の間に姑と母が亡くなった。姑と母の最期を見て私自身の最期はどんなだろうか、又どんな最期が良いのだろうかと考え続けた。子供の世話になりつつ、いっしょに暮らすのか、それとも老人ホームに入るのか、それとも病院で最期となるのか、様々な最期を思い浮かべた。

一方「介護」について最近テレビや新聞で盛んにとりあげられているが、それらに真剣に飛びこめない自分でもある。がそれはそれとして、私はそろそろ自分の「死に場所」や「死に方」を考えなくては思っている。だがそれも、なかなか「つかみにくいもの」となっているのが今の心境である。

# お話ボランティアを通して

国文学科(大学一回卒)

西脇里美

私がお話ボランティア(静岡お話の会)の活動に参加して二十数年になる。幼少の頃、寝物語に聞いた祖母の昔話の楽しかった記憶や、卒論で取り上げた「歌祭文」等の語り文化への興味が活動への参加動機となっていた。

当初は図書館の一室で細々と始めたこの活動も、現在は様々な所に広がり小学校・幼稚園・養護学校さらには言語教室や公民館などへも公演に行くようになった。主には昔話の素話である。ここ数年は、小学校からの依頼が多く、秋の読書週間は忙しい。その背景には、子供たちの読書離れが進む中、近年特に子供の心が見えにくくなり、文部省以下「子供の豊かな人間性を育む」という教育の重要課題に直面していることが考えられる。私たちは読書指導支援として学校参加の意義を再認識していく事が大切であろう。

最近、ある高校で公演した折、「肉声で語ってくれるお話を聞くというのは、読むこととは全く違うんだということに気付いた。」という生徒からの感想があった。

肉声で語ることで、物語の持つ語彙感を体験し、豊かな想像力を生むという教育的側面のみならず、聞き手と語り手が楽しさを共に分かち合えることを、何よりも大切にしたいと思う。それは私にとって思いがけない自己発見の場でもあるからだ。

総会報告

詩田先生のご講義を聞いて

英文学科(短大九回卒) 大石 紀子

今年の総会後の詩田先生のご講義は、県大の教室で行われた事と、健康診断で...

講義する詩田先生



平成10年度収支決算

自 平成10年4月1日 至 平成11年3月31日

Table with 2 main columns: 収入の部 (Income) and 支出の部 (Expenditure). It lists various items like interest, fees, and salaries with their respective amounts in yen.

(繰越金 内訳)

Table showing the breakdown of carry-over funds (繰越金) into categories like 定額貯金 (Fixed Amount Savings), 公社債金 (Public Company Bonds), and 普通預金 (General Savings).

平成11年度収支予算

自 平成11年4月1日 至 平成12年3月31日

Table with 2 main columns: 収入の部 (Income) and 支出の部 (Expenditure) for the fiscal year 2011. It lists budgeted amounts for various categories.

剣祭バザー収益金

31,350円

出品協力者

- List of names of contributors to the sword festival bazaar, including 佐藤容子, 内海恒子, 八木文子, 牛木琴, and 飯室竹代.

ありがき

この四月介護保険制度がスタートしました。誰もが注目してしま...

計報

元家政学部長 川田俊一先生が十月に御逝去されました。御冥福を心からお祈り致します。

編集委員